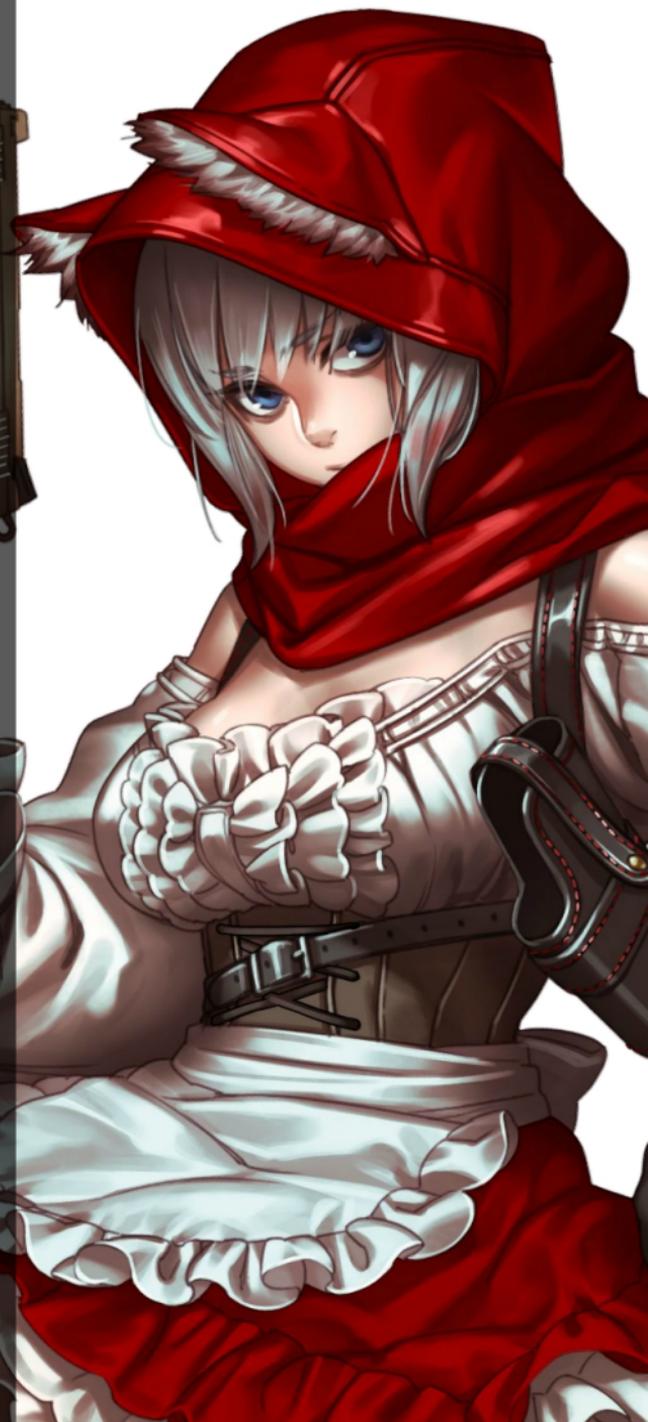


愛されたい
異世界赤ずきんは

COLT M&M USMC

「ブラック社畜と
異世界赤ずきん」

特別続編
シナリオ



異世界転移恋愛奇譚シリーズ発売中作品紹介

現実社会は辛い事ばかりだから、異世界の少女と幸せになろう。



ヒロイン：
エイリス

「ブラック社畜と赤ずきん」

クーデレ少女に尽くされたい。

主人公の部屋に突然現れた赤ずきんの少女エイリスとの交流と愛情を描く第一作。ブラック企業勤めで毎日が辛い主人公が、クーデレ気味に尽くしてくれるエイリスとの交流と献身的なHによって、徐々に強い自我を取り戻していく物語が見所です。



睡眠姦/布団で初H/夜の電車でH
お風呂で貪欲フェラ/甘々ご奉仕H



ヒロイン：
メリル

「ゆるふわメイドと機関銃」

ゆるふわ天然メイドに癒されたい。

夜道で拾った異世界メイドとの交流を描くドタバタラブコメディ風の第二作。異世界でクビになったロリ巨乳メイドが、主人公の為に何とか役に立とうと大奮闘。人それぞれで良いじゃないとお互い慰め合いラブラブエッチに過ごすふんわり物語。



無邪気に手コキ/ご奉仕フェラ
ラブラブ初H/朝だけど二回戦



ヒロイン：
エイカ

「その淫魔は雨と共に」

エロいメンヘラと共依存したい。

雨が降りしきる夜の公園で出会った、妖しい黒ずきん少女との危険な愛欲を描く第三作。童貞で孤独な主人公がメンヘラ淫魔少女と流されるままに性交し、それから彼女なしでは生きられないと強い愛着を抱いていく共依存溺愛ダークラブストーリー。純愛です。



雨濡れ騎乗位で童貞喪失/甘々授乳手コキ
貪欲肉食エッチ/お尻で初エッチ



ヒロイン:

ローヤ

「吸血メイドのご奉仕生活」

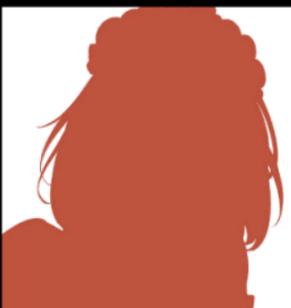
高雅な吸血鬼メイドと夜通しHしたい。
夜道で助けた美女は異世界のメイドで吸血鬼
でしたという第四作。

出会いの場面が済んでからは、ひたすら攻守
交代しつつ夜通しセックスしっぱなしのエロ
さ大濃縮作品になっています。オススメ。

初めての吸精フェラ/ラブラブ中出し初H



パイズリご奉仕/騎乗位攻H/反撃種付プレス
気絶するまで絡み合い/朝勃ち性処理セックス



ヒロイン:

?

COMING SOON...

メイド要素を全面的に活かした
バブみ癒し系作品にしようと思っています。



ヒロイン:

?

COMING SOON...

食うか食われるかという感じの
ホラー系作品にしようかなと思っています。

『ブラック社畜と異世界赤ずきん』のあらすじ

ブラック企業に勤める社畜であり、童貞で恋愛経験すらない『俺』。

暗い毎日に身も心も疲れ切っていたある日の夜、俺の自室に、異世界から一人の少女が現れた。

彼女の名はエイリス。

赤ずきんの格好に身を包んだ、人形のように美しい少女。

異世界で罪を犯した彼女は、片道切符の流刑となり、この世界へと強制転移させられたのだと云う。

現代社会に虐げられ続ける俺と、異世界で居場所を失くした孤独な少女。

互いの寂しさを癒すように惹かれ合っていく、強く結ばれていく。

何度も熱く身体を重ねる度に、愛は深まり、勇気が生まれた。

そうして社畜生活を脱出した俺は、エイリスと共に、新たな人生を歩み始めた。

『異世界赤ずきんは愛されたい』

「……旅ってのは、出発する瞬間が、一番輝いてたりするもんだよな」

地下鉄駅内のベンチに力なく腰掛けている俺は、缶コーヒーをグイッと飲み干すと、大きな溜め息をこぼした。

「人生ってのは、どうも上手くいかない。努力は必ず報われるって言葉があるが、本当でもあり嘘でもある。確かに成功者はすべからく努力しているのは間違いない。けれども……その一方で、努力をしたのに報われないままの人間も大勢いる」

目の前を無関心に通り過ぎていく人々をぼんやりと眺めながら、俺は呟く。

「成功者たちの輝かしい体験談の山の下には、無数の声なき悲鳴が下敷きになって埋まっている。人間は綺麗なものばかり好んで見たがるが、実際の世の中ってのは、そんなものだ」

俺は自嘲気味の笑みを作りながら、空っぽの缶コーヒーを強く握りしめた。ミシッと軋んで缶がへこむ。

社畜から無職へとクラスチェンジした俺は、再就職先を求めて奔走する日々を送っていた。

一念発起してポジティブな希望を常に想いながら挑んでいるが、立ちはだかる現実の壁はどうにも厚く高く、悪戦苦闘が続いている。

書類選考落ちの惨敗が続く中で、今日はようやく面接まで漕ぎ付けることができたのだが、結局その手応えは悪く、不採用となるのは明白だった。

七年も社畜生活に耐え抜いたのだから、自分には相応のポテンシャルが宿っていると思っていたが、蓋を開けてみれば社会的に特筆できるような優れた技能もなく、世

間に認められるような優良ホワイト企業の狭き門をくぐるには、足りないものが多い。
ぎる。

ブラック企業なんて二度と御免だと思っているが、実際のところ、それを選び好み
できる立場に俺はないのだ。

俺は再び大きい溜め息をついて、顔を俯かせる。

しばし沈黙が流れた後、俺の隣からこんな言葉が発された。

「……世の中のことなんて気にしても、始まらないよ」

そこには、壁に寄りかかって腕を組み、達観した瞳で目の前の空気を見つめている、
俺の最愛の恋人がいた。

「重要なのは、ご主人さまの未来だけ。それ以外のことを憂う必要なんてない。ボクも
ご主人さまも、世界を変える神なんかじゃないんだから」

彼女は、異世界からやってきた赤ずきんの少女、エイリス。

家族を殺した罪により元住んでいた場所を追放され、この世界へと強制的に轉移させられた、悲劇のヒロイン。

エイリスが俺の部屋に轉移してきたことにより、俺の人生は大きく変化することになった。

その出会いは、まるで昨日のことのように鮮明に思い出せる。一生、忘れはしない。交際経験すらない惨めな童貞社畜であった俺に、孤独なエイリスは身寄りを求めて一心に縋ってきた。清らかな聖者ではない俺は、初めての体験する異性との交流に、本能を我慢することができなかった。けれどもエイリスは、今まで男を許したことがない身体であったにも関わらず、俺の行為を自ら優しく迎え入れてくれた。

それから少しばかり紆余曲折あったものの、今では俺とエイリスは深く愛し合う恋人同士になった。

隣に彼女がいるおかげで、苦しみの中でも俺は生きていける。

だが、こんな幸せがいつまで続いてくれるだろうか。

「なあ、エイリス……」

「ん……どうしたの」

何の功績のないみっともない姿を晒し続けているばかりの毎日で、このところ俺は彼女に失望されないか不安に駆られ続けている。普通の女性であつたら、とっくに愛想を尽かされていることだろう。

「俺のこと……愛してるか？」

卑屈な心境になって、そう尋ねてしまう。

するとエイリスは、明らかに目つきをギリッと強めて、穴が開くほど俺を横目で睨み付ける。

「疑ってるの？　ボクが、ご主人さまに嫌々付き合ってるように見えるの？」

「……え、あ、いや……そ、そういう意味じゃなくて……」

「何処に行くにもずっと二人一緒。家ではご飯を作ってあげたり、お風呂で身体を洗ってあげたり、ご主人さまがしたい時にいつでもエッチしてあげてる。なのに……ボクの愛が伝わらないって言うの？」

どうやらエイリスの暗黒面のスイッチをまた入れてしまったらしい。彼女は時々こうなる。

彼女の脇のホルスターには常に拳銃が差さっている。これは本物だ。

ちなみに、俺たち二人の存在は、彼女の使う魔法の影響で周囲の人間には認知されていない。つまり、最悪、ここで俺がエイリスに射殺されても誰も騒ぐことはない。

エイリスはゆっくりと俺の前に回り込んできて、腰をかがめて俺と間近に視線を合わせた。

俺は、蛇に睨まれた蛙そのもので、全く身動きできなくなる。

「ひょっとして、ボクに飽きちゃった？」

「いや、そんなことあるわけないだろ……！」

「今まで言わなかったけど、知ってるんだよ。ボクがお風呂に入ったり寝ている間に、時々、スマホでエッチな漫画を見て自分でシコシコしてるって。ご主人さまの精液の匂い、ボクが分からないとでも思ってるの？」

俺は引きつった息を上げる。

二次元は別腹と言うか、男はそういう生き物なのだ。決して、飽きたとか浮気したいという願望があったわけではない。

「い、いや……！　そ、それは……エイリスの身体を、氣遣って……」

「嘘。性欲が高まったご主人さまは、ボクを氣遣うようなキャラじゃないでしょ。寝ていたボクを起こしてお尻を犯したり、電車内で何度もしゃぶらせたりしたこともあったよね。ボク自身だって、いつでもどこでもエッチして良いよって言ってるよね？」

誤魔化しは通用しない。俺は自分の奔放さを改めて自覚し、強く恥じる。

思えば、初めて出会った時も、エイリスが意識を失っている間に身体を触ったり口内に射精したりとやりたい放題をしたものだ。

ちなみに電車で行為を求める回数がいやに多くなりがちなのは、社畜を辞めた日に電車内でエイリスの方から大胆にエッチを求めてきた出来事をきっかけに、変な嗜好がついてしまったせいだ。鬼畜というわけではない。恐らく。

「ご……ごめん。俺は確かに猿になってしまいが……でも、エイリスに飽きたとか、そんなのは絶対じゃない……！」

俺は慌てて釈明するが、エイリスは全く瞬きせず俺を見据えながら一人語り始める。

「……ボクのお父さんとお母さんはね、浮気が大好きだったんだ。いつも同じ相手じゃ飽きて冷めるからって、いろんな人と関係を持って欲求を満たして、それで週末にはお互いの浮気相手との行為内容を明かし合って、嫉妬心を焚きつけたところで激しくエッチするの。……ボクにはぜんぜん分かんない。二人とも、ぶっ壊れてたんだと思うよ。兄弟も沢山いたけど、みんな顔も性格も似てなかった。みんな、種が違う

から。だからボクは、本当の意味での親を知らずに育った」

憎悪を込めた口調。エイリスは、言葉を失う俺を睨みながら続ける。

「ご主人さまも、そうなるうとしてるの……？ 他の女の身体を求めないと、ボクへの愛が冷めちゃうの？ それとも、もっと酷いこと……ボクが他の男に抱かれてほしいとでも考えてるの……？」

彼女の瞳に、一抹の悲しみが宿る。

「……もし、ご主人さまがそうだと言うのなら……その時、ボクは……」

エイリスはゆっくりりと、右手を自分の拳銃に掛けようとする。

そこで俺は、エイリスを思い切り掴まえて、強く抱きしめた。

「あっ……」

「心配かけて本当にごめん……エイリス。俺は、君を愛してる。君が俺を愛してくれているのも、ちゃんと分かっている。エイリスは何も悪くない。俺は……自分に、自信が無かったんだ。エイリスの愛に応えられるような男になりたくて、ずっと足掻いているけど……この通り、格好悪い姿を見せてるばかりだ。こんな俺を、愛してくれて……本当に、すまない……そして、ありがとう。俺は……君の為に、頑張りたいんだ。愛する妻を守る、立派な夫として、な……。まあ……そんなのは遠い理想像に過ぎないが……でも、とにかく……エイリスに恩返しできる日を迎える為に、頑張りを続けたい……その気持ちに、嘘は無い」

俺は自分の不甲斐なさに悔し涙をこぼしながらも、エイリスを抱きしめ続けた。するとエイリスは、静かに自分の両腕を俺の首に回して、またがってしがみついてくる。

「……ありがとう。でも……無理しなくていいんだよ。ボクは、ご主人さまが居てくれるだけでいいの。どんな身なりをしても、ボクにとって、愛するご主人さまは、この世にたった一人しかいないの。ボクは、ご主人さまに愛されるだけで幸せ。地位も名誉もいらぬ。ずっと、ご主人さまと過ごす日々が続いてくれれば、それでいいんだ。だから……自分を責めないで、気長にいこう……？ この世界は広いし、人生はまだまだ長いんだから……」

俺は温かい彼女の抱擁に、涙を流し続ける。

しばらくそのまま抱き合った後、熱い眼差しで見つめ合う。

「エイリス……」

「ご主人さま……愛してるよ……ずっと、永遠に……」

自然と、唇が触れ合った。

一度では足りず、何度も唇を重ね、やがて彼女の舌が差し入れられてきて、そのまま俺は舌を絡める。

お互いに決して放さないと言わんばかりに強く抱き合い、長く深いキスに溺れていく。

彼女の愛情を受けた俺の雄が、ズボンの下でゆっくりと膨らみ始めた。

その先端が、またがる彼女のスカートの奥を押しした。彼女の温かい股の双丘に、先端が深く押しつけられる。

唇を離れたエイリスは、自ら腰をくねらせる。

「ん……当たってるよ……ご主人さま？」

彼女が、俺の身体を求めると合図だ。

ここにはベッドは無い。ラブホテルを探して泊まり込む資金的余裕も無い。だが、愛し合っていれば、体裁なんか気にする必要は皆無だ。

俺とエイリスはそんな気持ちで、汗ばむ手を繋ぎながら、近くの男子トイレに入っ
ていった。

幸いなことに、トイレは清掃が行われて間もないのかさほど臭いも無く、今のところ利用者の姿も無い。

二人でトイレの個室に入り、鍵を掛けた。

彼女の魔法があればあのベンチで性行為を始めても認知されることはないが、やはりこんな場所でも二人だけの空間で愛し合いたい。

俺は個室の壁にエイリスを押しつけながら、再び貪るようなキスをする。

唾液に濡れた舌を擦り合わせて粘膜を刺激しながら、彼女の柔らかい胸を触る。

「んちゅっ……ご主人さまったら……」

エイリスは俺の股間を焦らすように擦りながら、心地よさそうに身を委ねる。

俺は彼女のドレスの胸元をずり下げて、ブラを着けていない彼女の乳房を晒した。

幼げな顔立ちに見合わない、豊かに膨らんだ胸。彼女の桜色の乳首はすでに、興奮で起き尖っている。

俺は普段よりも優しめに、彼女の乳房に手を添えて、ゆったりと揉み始める。

「んん……」

彼女の肌は白くすべすべで、とても温かく柔らかい。いくら触っても飽きることは

ない。

撫でるように揉みまわしてから、親指を使って彼女の乳首をこねる。

「……………んっ……………！」

気持ち良かったのか、ピクリと反応する。

乳首の先はほんのり湿っており、指に吸いつくような感覚をもたらしってきた。そのまま彼女の刺激を高めていくように、乳輪を撫でながら、乳首の先端をくりくりと揉み続ける。

「んう……………くすぐりたいよ……………」

恥じらう彼女が可愛くて乳首を弄り続けていると、乳頭から、白い液体がにじみ始めた。まだ妊娠はしていないはずだが、どうやら刺激により母乳が分泌し始めたようだ。

「わっ……おっぱい出ちゃう……」

エイリスも自分の身体の変化に驚いて、頬を赤らめて胸元を隠そうとするが、俺はその手を避けて強引に彼女の乳首に口をつける。

「ひゃあっ……!!」

舌先を這わせると、薄甘いミルクの味が広がった。

俺はさらに興奮して、彼女の甘い乳首を優しく吸いながら、もう片方の乳房の先端を指でいじめつつける。母乳で指がしっとりと濡れ始めたところで、俺はその乳首にもパクッと口をつける。

「ご主人さまぁ……やあん……!!」

エイリスは俺が成すがままに悶えるばかりだ。

普段はクールなのに、こうして責めに回った俺に胸を弄られると、すっかり縮こまってしまう。そのギャップが、何とも愛おしい。

俺は満足するまでエイリスの胸を揉み舐めた後、彼女を便器に座らせる。

「エイリス……パンツ、脱いでみて……」

「うん……でも、おしっこ見られるみたいで、恥ずかしいよ……」

エイリスはもじもじしながらも、スカートの中に手を差し入れてパンツをゆっくりと降ろしていく。

公共の場のトイレという狭くて快適とも言えない空間だが、それがいやに生々しさを惹き立てていて、家でセックスするのとは全く異なる興奮を感じる。

「ほら、エイリス……大事なところがスカートに隠れたままだよ？」

「むう……。やっぱり、ご主人さまは……きちく」

頬を膨らませながらも、エイリスはスカートをたくし上げていく。

そして、こもっていた雌の香りがふんわりと解き放たれて、彼女の秘部が露わになった。

エイリスは、俺が頼んでいないのに、自らその恥丘を指で開いてみせた。

「ほら……これでいい？ ご主人さま……？」

陰毛が少なく綺麗に閉じられていた陰部が、彼女の指によってくちゅりと押し開かれ、愛液で潤った卑猥な肉穴が俺の前にさらけ出された。

ここが、最愛の彼女の膣の入口。俺のペニスにぴったりとまとわりつき、至上の快楽を与えて子宮への射精を促してくる、俺だけが挿入を許された生殖器。

俺は導かれるように、その肉穴にキスをした。

試読版は以上です。続きは本編で！

俺の部屋に、
異世界から
少女が現れた。

R18
ADULT ONLY
成人向け

「ずっと一緒にいてね。…何があっても」

異世界転移ファンタジーR18純愛ノベル

著：相山タツヤ

ブラック社畜と異世界赤ずきん

R18
ADULT ONLY
成人向け

今日、
異世界の
メイドを拾った。

「わたしに任せて、ご主人様！
何も出来ないけど、がんばります！」

異世界転移ファンタジーR18純愛ノベル

著：相山タツヤ

ゆるふわメイドと機関銃

R18
ADULT ONLY
成人向け

その宿無し少女、
淫乱メンヘラ。

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

その淫魔は 雨と共に

著：相山タツヤ

「わたしも、すごく寂しいの。
一緒に、幸せになるうね……？」

助けたメイドは、
吸血鬼でした。

吸血メイドの ご奉仕性活

R18
ADULT ONLY
成人向け

「私が、貴方のメイド兼お嫁さんになってあげる……ご主人様？」

著：相山タツヤ

異世界転移ファンタジー
R18純愛ノベル

ガンスミス・アイヤマ

